

19m07

教育方法論m 解答例

1授業をデザインすること

教育方法論 m 第 回

テーマ「^{授業をデザイン}
授業のデザイン」

(1) 「新しい時代の教育方法」から

全体の要点●

自分のクラスの子どもたちの実態に基づいて、何をもどう教えるかを考える。

- ポイント1) 授業は「教材のもっている本質」と「教師のねがっているもの」と「子どもたちの思考・感情・考え方」の3つの関係
2) の中に成立する。
3) 教師、子ども、教材それぞれの間に「衝突」や「葛藤」が生じるような緊張関係をもった授業がよい。
4) 子どもの状況に 対応する柔軟さも求められる。

(2) 「17 中学校学習指導要領解説」「18 高等学校学習指導要領解説」等から

全体の要点●

- ポイント1) 生徒や学校、地域の実態を適切に把握することに努める
2) 知識及び技能を習得されるようにする。
3)
4)

(3) その他のネット資料から長所・短所

全体の要点●

- ポイント1) 子どもの学習状況、教師の学習指導、教材・教具、学習指導案の検討という
2) 4つの観点から授業をデザインするべき
3)
4)

(4) 自分の意見

全体の要点●

- ポイント1) 教師と生徒という対面の関係ではなく、教材や地域との関係性も
2) 考慮に入れて 授業づくりをしなければならない。
3) 一番考慮しなければならないのは子ども、
4) 子どもの状況に応じて 適宜変えていかなければならない。

(5) 出典(文献名、url 等)

- (1) 文部科学省(2017)。「中学校学習指導要領解説」, pp.1-6.
(2) 文部科学省(2018)。「高等学校学習指導要領解説」, pp.1-6.
(3)

授業

教材の持つ
本質

教師の
わがうもの

子どもたちの
思考、感じ方、考え方

よりよい

子ども

教師

教材

状況

柔軟

衝突、葛藤

2教科内容と子どもの学び

教育方法論 m 第7回テーマ「教育内容と子どもの学び」6.

(1) 「新しい時代の教育方法」から

全体の要点●

学習者に必要な知識とは何かという観点から教科内容論の見直しが求められている

- 1)「知識伝達」型から「知識創造」型の学び(森,2002)
- 2)「階段型」カリキュラムから「登山型」カリキュラムへ(佐藤学)
- 3)教科内容論的アプローチと社会文化的アプローチの克服が課題

(2) 「伝達型の授業」から、「自ら考える学び」-夢ナビ- から

全体の要点●

自分の意見をきちんと主張できる人材を育てる必要があるのに、今の教育方法ではそれらを身につけることが困難

- 1)「伝達型」の授業では思考力や判断力・表現力を身につけることが困難
- 2)正解が決まっても改めて考えさせる
- 3)受身ではなく、友達と一緒に考えながら、口に出して発表しあう学習法を取り入れる（アクティブラーニング）

(3) 意思決定力の育成を目指す社会科カリキュラムの工夫 後藤 康宏 から

全体の要点●

子供の課題である課題把握場面や課題追求場面においてどのようにして事実認識を深めるかについては、意思決定過程を取り入れるだけでは不十分。

- 1)階段型は学びが画一化されており、学びを狭い経験に閉ざしている。
- 2)登山型は多様な道筋が学びの過程に準備されている
- 3)登山型は個々のニーズに応じて主体的に学習に取り組める

(4) 自分の意見

全体の要点●

従来の学びの方法やカリキュラムにだって良い点もあり、それらを生かした教育をしていく必要があると感じた

- 1)伝達型は今まで興味がなかったものから興味を沸かせることができる長所があるが、表現力などの個性を伸ばせないという短所がある。
- 2)登山型は様々な長所があるが、その一方で道が自由すぎて途中で目標を見失う（遭難的なもの）恐れがある
- 3)知識創造型は積極的に話し合いを進めることでより良い結果を出せるが、人と話すことが苦手な人に対して特別な配慮が必要となる

(5) 出典(文献名、URL 等)

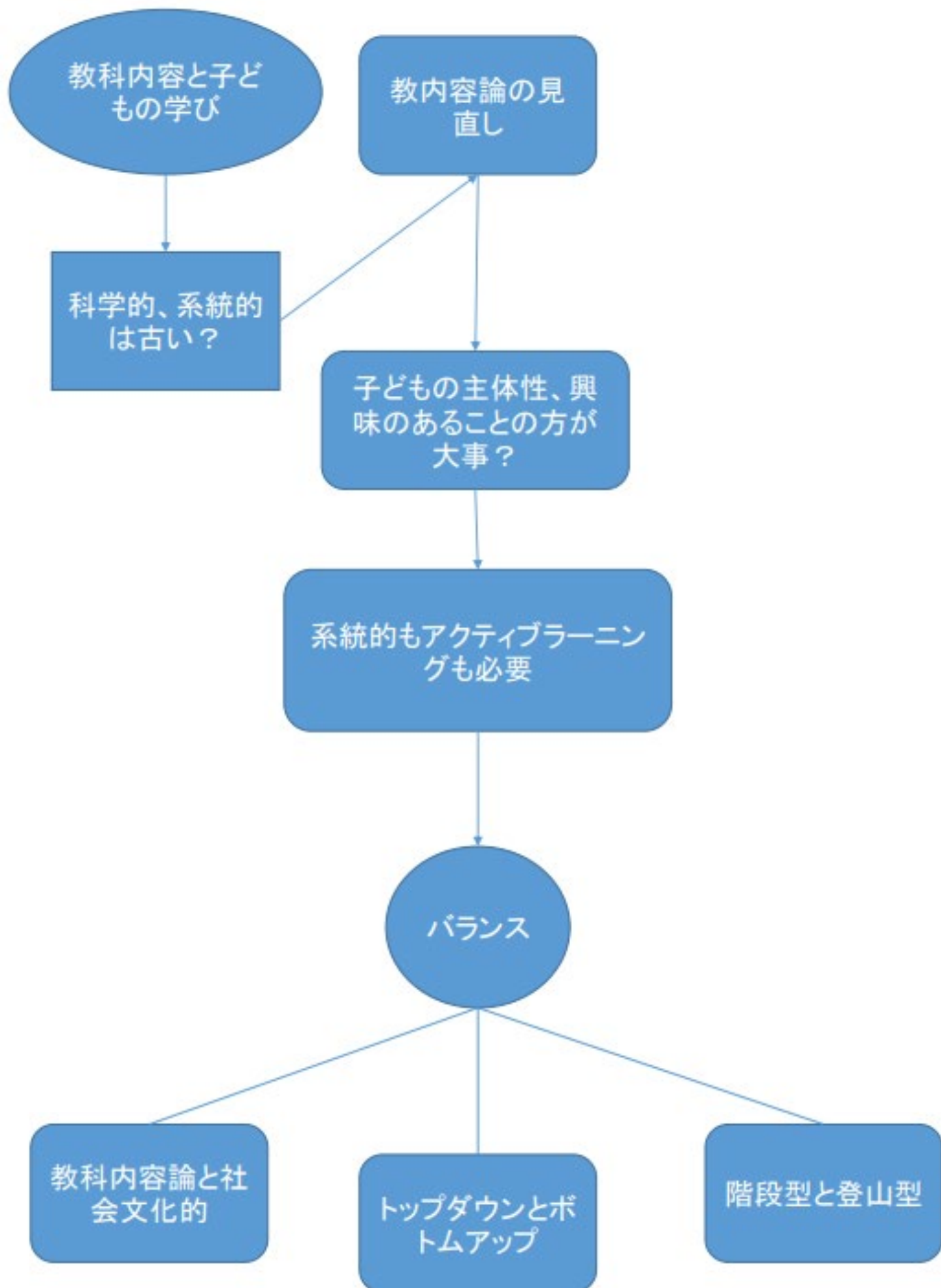
(1) 新しい時代の教育方法

(2) 「伝達型の授業」から、「自ら考える学び」-夢ナビ

<https://yumenavi.info/lecture.aspx?GNKCD=g007753>

(3) 意思決定力の育成を目指す社会科カリキュラムの工夫 後藤 康宏

https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=5&ved=2ahUKEwiOjJ-ghvXIAhV5x4sBHdIIDrEQFjAEegQIBBAB&url=https%3A%2F%2Faue.repo.nii.ac.jp%2F%3Faction%3Drepository_uri%26item_id%3D6689%26file_id%3D15%26file_no%3D1&usq=AOvVaw3xtX4uAdFT367ZMS_2_H1y



3対話的・共同的な学びのために

教育方法論 m 第5回

テーマ「8-1 教材づくりの発想」

(1) 「新しい時代の教育方法」から

全体の要点●

ポイント1)「学びからの逃走」という事態

「宿題や自分の勉強をする時間」が OECD 参加国中最小。

各教科の教育は「学びからの逃走」を食い止める必要がある。

2)「学び」と「勉強」の違い

「学び」……子どもが自発的に。知識的な興味・関心。対話的・共同的。個人内評価。

「勉強」……子どもに強制的に。将来・試験のために。個人的・排他的。テストで評価。

3)「出来事」に開かれていること

自分と他者の矛盾を解消するために「対話」が必要。予想外の「出来事」を大事にすべき。

4)「ズレ」から出発する生産的な対話であること

各自の「ズレ」に気づき、学びの可能性を見出す必要性。

5)「アプロプリエーション」としての学び

「納得・共感」「葛藤・対立」により、「知識・技術」を自分のものに。知識を自分のものに。

6)「アプロプリエーション」としての学びと事例

子どもへのアドバイス「納得・共感・葛藤」が重要。

子どもたちの対話的・協同的な話し合い、学び合い。

(2) その他のネット資料から長所・短所 楽しいと学習意欲が増し、主体的な学びの姿勢に

全体の要点● 新しい授業で生徒を楽しませながら学ばせる

ポイント1)「モジュール学習」……15分×3の授業で。

2)短い時間で楽しませる。

(3) 自分の意見

全体の要点●

生徒の平均勉強時間（課題・宿題・自宅学習）が世界に比べて低い。

ポイント1) 国際教育到達度評価学会では「理科の授業がたのしい」……58% 国際平均 78%

「理科を勉強すると日常生活に役立つ」……53% 国際平均 84%

2008年の学習指導要領の改訂後から「知識・技能」が重視

出典(文献名、url等)

(1) 文部科学省(2017).「中学校学習指導要領解説」. pp.1-6.

(2) 文部科学省(2018).「高等学校学習指導要領解説」. pp.1-6.

(3) 「新しい時代の教育方法」

(4) 学校現場の ICT 活性化マガジン

学び

相互に交わり、大人の
手を借りる

対話的・共同的

ズレ

可能性を見出す

勉強

無理やりさせる

個人的・排他的

アプロプリエーション

人の考えを自分の考えに

4ICT活用例

ICT 活用例

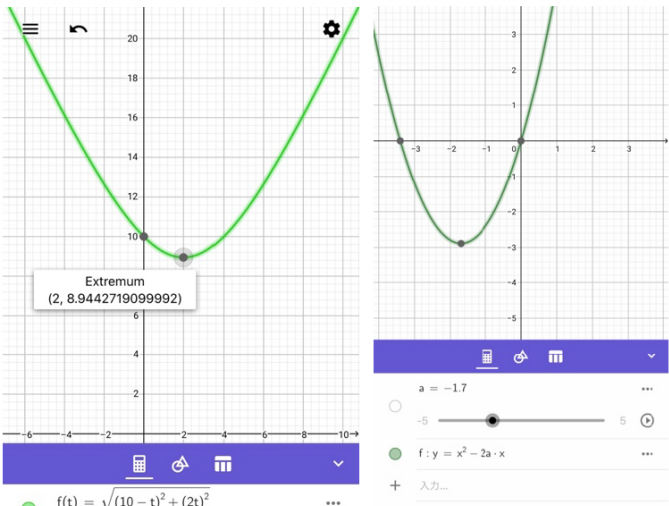
1. 単 元 数学 I 二時関数

2. テーマ 二次関数の最大・最小値に関する基本問題と応用問題

3. ICT 活用のねらい

- ・ グラフを板書する時間の短縮
- ・ 点の移動による最大・最小の探索の見やすさ
- ・ 応用問題におけるモデル化した式のグラフ化

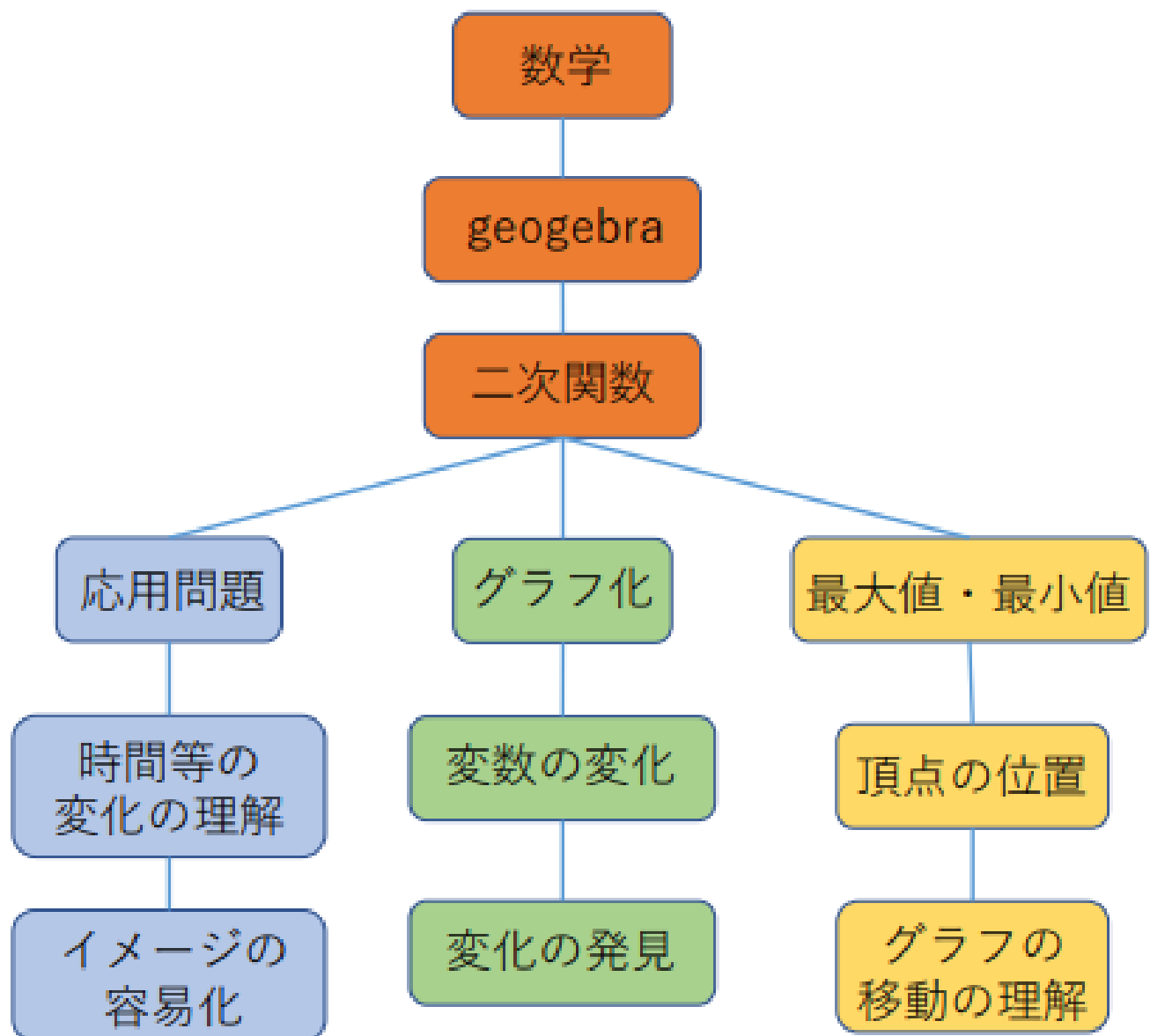
4. ICT 活用例

学習内容	指導過程・学習活動	指導上の留意点
ICT 活用の場面 (時間や水量などの変化量を交えた二次関数の応用問題) 最大・最小値を求めるような問題をプロットしたグラフから確認する。変数の変化により、点やグラフ、範囲を変化させたり動かしたりする事でイメージが容易になる。	ICT 活用の手順 ○与えられた問題から図や式を求める ・いきなり式を入力しようとしても、解答やグラフがプロットされないのと、範囲の指定があるため。 ○geogebra に求めた式を代入 ・入力した式が画面にプロットされる。 ○グラフから最大・最小値の位置を確認してもらい、問題の解説を行う ・範囲の観察や他にも変数がある場合などには、変数を動かしてもらい、新たな発見をしてもらう。 イメージ図など 	○ネットワーク環境を用いるので、他の事を行なっていないか、トラブルが起きていないかを確認する ○geogebra の扱い方を必要なものだけ説明する ○解答が確認できたで終わらせないように、できた場合は説明をしてもらうようにする
備考 使用教科書 「数学 I」 準備物 …… タブレット端末(情報端末が使用できる環境), geogebra 授業形態と工夫 …… できるだけ数値でなく変数を扱わせた上でモデル化をしてもらい、アプリケーションで変数を変化してもらう		

5. 出典・参考等

- ・ 数学 I (出版社：数研出版)

ICT活用例



5 確認問題06

教育方法論 m

第6回

確認問題 06

(1) 相対評価から目標に準拠した評価に転換した意義を4つ挙げよ。

- ・ 公衆社会を生きるために必要な学びをすべての子どもたちが身に付けさせることが必要
- ・ 学習における共同の条件が生まれること。
- ・ どのような学力が形成されたのか明らかにできる
- ・ 評価を通じて教師の教育活動の改善と子どもたちの学習の援助を通じて学力の保障をはかる。

(2) 次の、自己評価の重要性に関する文の、空欄を埋めよ。

自己評価とは（子どもたち）が自分で自分の人となりや学習の（到達状況）や学習の（過程）を評価することをさす。またそれによって得た（情報）によって、今後の学習や行動を（調整）することにもつながる。自己評価能力は、メタ認知とか（セルフ・リフレクション）とも言われる。このメタ認知は、「メタ認知的（知識）」と「メタ認知的（活動）」に区別される。この自己評価能力の（形成）が（生涯学習）社会の到来と相まって着目されている。

(3) 「パフォーマンス評価について、簡潔に説明せよ。

パフォーマンス評価とは、子どもたちが知識と実際の世界にどの程度うまく活用させているのかを測る評価である。学び得たものを様々なメディアを使って表現する方法として、文字以外の図や絵、演出して表現するという方法もある。

(4) 「構成主義的な学習観」「形成的評価の機能」「ルーブリック」のうち1つについて簡潔に説明せよ。

ルーブリックとは、評定尺度とその内容を記述する指標として成り立っており、「評価指針」と訳される。

ルーブリックは子どもたちにわかりやすい表現で公開されている。評価はどの時点での子ども達の到達点であり、最終判定での意味ではない。「パフォーマンス課題」を通して子ども達の認識活動の様相と教師が「授業研究と「モデレーション」を通じて的確に把握していないとダメなはずなの？」教師の評価リテラシーが鍛えられたらいい。

「構成主義的な学習観」

子どもたちを、自分を取り巻くさまざまな世界に対して主体的に働きかけながら、それなりの整合性や論理性を構築する有能な存在にとらえ、知識について、単に量的に蓄積するものではなく、自分の経験に関する意味を構成しつつ、環境との中で相互作用しながら学ぶこと、と学習をとらえる学習観のことである。 9章1節2項

「形成的評価の機能」

授業の過程で実施されるもので、授業にフィードバックされ、授業がねらい通りに展開していないと判断された場合には授業計画の修正や子どもたちへの回復指導が行われる。成績づけに直結させるものではない。 9章2節1項

**）確認問題 02 を自己評価し、

気づいたこと、感じたことをのべよ

■ 5段階自己評価（ 3 ）

■

ルーブリックは、評価するためのものであると思っていたが、子どもたちがわかりやすいようにしてあげて、教師の評価リテラシーなどに関係していることを知った。

